慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	未来時と未完結 (imperfective) アスペクト： 認知時を第3項とした日本語の分析より
Sub Title	Future time reference and imperfective aspect : a case study in Japanese
Author	佐野, けい子(Sano, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.50 (2019. 3) ,p.303- 324
JaLC DOI	10.14991/005.00000050-0303
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000050-0303

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

未来時と未完結（imperfective）アスペクト
認知時を第3項とした日本語の分析より

佐　野　けい子

1. はじめに

本稿においては、話者が事象の生起を捉えるための視点をおく時、認知時、を第3項とする時制・アスペクトの枠組の下で、どのような時間項関係が未来時に生起する事象に対応するかを、特に未完結相に焦点をあてて検討する。

時制がどのような時間関係と対応するのかを探る1つの研究方法は、時制を担う形態素や文法的形式の存在を第1の条件とし、それがどのような時間関係を表すのかを文法的形式から意味への方向で探るものである（Comrie（1976）（1985）, Dahl（1985）, Bybee et al（1994）, Smith（2008）など）。これに対し、Reichenbach（1947）は意味から文法形式へという方向で捉えようとした。各時制の表す時間関係を規定する時点として、S（Speech Time 発話時）、E（Event Time 事象時）に加え、第3の時であるR（Reference Time レファレンス時）という時を導入した。それら3つの時点の時間軸上での相互の位置関係、つまり同時あるいは継時的関係により3項間の可能な組み合わせ13種を求め、それらがどの時制に対応するかを明らかにしようとした。[1)]

これに対しComrie（1985）では、発話時と直接関係づけられる絶対時制はSとEとの2項の時間関係により表され、アスペクトは時制と対応する時間関係とは独立に質的に定義された（Comrie（1976））。

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第50号（2019）pp.303~324

その後 Reichenbach の研究を受け継いだ Klein（1994）は、第3の時を文が話題にしている時として TT（Topic Time 話題時）とし、さらに完了形が表すのは時制ではなくアスペクトであるとして、Reichenbach の提唱した3つの時間項関係を時制とアスペクトに分けて、2組の2項関係として呈示し直した：E ではなく TT と TU（発話時）との同時・継時的関係が時制を表し、TT と TSit（状況時）との時間関係が4種のアスペクトを表すとした。perfect（完了相）、prospective（前望相）は継時的関係で表され、imperfective（未完結相）は TSit が TT を完全に含む、perfective（完結相）は TT が TSit の全体か少なくとも終点とその直後の状態を含むとした。[2] これにより、Reichenbach では、E と R の同時性に加え、E が持続時間をもつことにより説明されていたフランス語の半過去などが、アスペクトを表す関係として再定式化されたことになる。

佐野（2017）においては第3の時間項として、事象を捉えるための視点をおく時である認知時（c）が導入された。この認知時と事象生起時（e）との関係が文法的アスペクトを表す。ただし、Klein とは異なり、アスペクトは事象の生起中に視点をおいて捉えるか（c ＝ e）（未完結相）、生起開始時以前（c ＜ e）あるいは生起終了時以降（e ＜ c）に視点をおく（いずれもここでは完結相として扱う）かの2種の対立としている（以下 a ＝ b は同時関係を、a ＜ b は a は b に先行することを表す）。またこのようにして得られた2項関係を認知時を介して発話時（u）に関係づける（c ＊ u）ことで、原理的には事象を捉える視点が発話時にある場合（c ＝ u）と、発話時以前（c ＜ u）、あるいは発話時以降におかれる（u ＜ c）場合とが得られることとなる。Klein では時制は TU と TT の2項関係で与えられるとしているが、この枠組みでは、アスペクトを含む3項の時間関係が時制に対応することになる。

これは上記のように、各々 3通りある2項関係同志、（e ＊ c）と（c ＊ u）の組み合わせによるものなので、原理的には9種の3項関係が得られることになる。（ただし、以下に見るように、9種の可能な組み合わせの内、以下に挙げた未来時に関わる4種については後の課題として残された。）この可能な3項関係に対して、どのような時間表現が対応するかを日・英・仏語の

直接法単文について検討している。その結果、時制、文法的アスペクト、時間的副詞類を含めたユニットが各3項関係に相互排他的に対応することが認められた。

より具体的には、現在時や過去時における事象生起に言及する表現では、検討した3言語において、表現そのものは異なるものの、表現方法にかなりの共通性が認められた。視点が発話時におかれた時も（完結相過去）（e ＜ c ＝ u）、また、過去のある時におかれた時も（未完結相過去）（e ＝ c ＜ u）／（完結相過去完了）（e ＜ c ＜ u）、いずれにおいてもそれぞれの表現が担う意味クラスはほぼ同じであった。[3] しかし、未来時に生起する事象については、認知時が発話時におかれた場合の組み合わせ（u ＝ c ＜ e）（完結相未来）についてのみ検討された。その結果によると、直近の生起確率が非常に高い場合には現在形を用いるという点は3か国語とも共通して認められた。しかし、独立した未来時制を持つか（仏）否か（日・英）、未来時への言及に特化した法助動詞が関与するか（英）、過去への言及にも用いられる推量の助動詞が関与するか（日）など、過去時への言及に比べ、言語による表面上の多様性が大きいことが認められた。

未来時への言及に関わる残りの4種の時間項の組み合わせについては、より詳細な検討のために後の課題とされた。その内3種は未来時のある時に視点をおいて（u ＜ c）事象を捉える（c ＊ e）場合であるが、そもそも未来のある時に視点をおくというのは可能かということが問題となる。さらに、その特定の未来時に生起中の事象に視点をおいて、その事象を非有界なものとして捉える時間項関係（u ＜ c ＝ e）（未完結相未来）は、どのような状況を表しているのかについては詳細な検討が必要とされた。[4]

本稿はその解明に向けた、日本語のみを考察の対象とした覚書である。以下2節では認知時の役割に焦点をあてて、佐野（2017）における基本的枠組みを概観する。その後3節では、本稿の目的とする未来時における事象をその生起中に捉える未完結相の可能性を探る。そのために、過去時に生起する事象を捉える場合に、完結相と対比して、未完結相にだけ認められる特徴について確認する。4節では過去時において見られた未完結相の特徴は、未来

時における事象についてはどのような予測をするのか、そしてその結果からどのようなことがいえるかを検討する。5節はまとめと考察である。

2. 認知時を要とした3項の時間関係

先に見たように、佐野（2017）においては、第3項として、Reichenbach の R とも、Klein の TT とも役割の異なる認知時（c）を導入した。これは事象を捉える視点をおく時間軸上の位置を表す。これにより、事象の捉え方を表すアスペクトの対立を、2つの時間項の継時的関係対同時関係の対立として表すことができる。事象生起時（e）とその事象を捉える視点をおいた認知時が時間軸上で同時の場合（c = e）には未完結相を、継時的な場合には完結相を表すものとする。その視点のおかれた認知時をさらに発話時（u）と同時（u = c）、それ以前（c ＜ u）、それ以降（u ＜ c）と関係づけることでアスペクトに応じた時制を表すことができるとした。

ここで時制、アスペクトという語は、特定の形態素など文法形式を指すのではなく、Klein と同様意味上の対立概念として用いている。またここで時制とは、発話、認知、事象生起という3つの事象が生起する時が時間軸上で相互に示す関係を表すものとする。

ここでは3つの時間項はいずれも変数として時の副詞類や文脈などにより指定可能なものとされている。

また完了形は、ここでの枠組みでは、状態を表す場合と、認知時との継時関係を表す場合があるとされた。完了相として捉えられるときには、本動詞の表す事象が生起完了した結果生じた状態を表しているとみなす。[5] この場合には助動詞が時制を担うものとし、非有界な未完結事象として扱う（日・英・仏：未来完了、英 : 現在完了、日：過去完了）。また、認知時以前の事象の生起（e ＜ c）のみを表している場合には、発話時との3項関係により時制を表すものとする（仏 : 複合過去、英・仏：過去完了）。

以下、3つの時間項は、説明の便宜上1つの時点として表す。しかし、必要があれば、ある時間範囲をもつことを排除するものではない。一般的に、

個々の事象についての発話時と認知時とはその持続時間は非常に短いといえる。それに対し、事象の生起に要する事象生起時は、持続時間なしで状態変化するものから、限定なしの長期間継続するものまでさまざまな持続時間のものがある。ここでの枠組みでは、事象を捉える視点を事象の生起中におく場合を未完結相としているために、持続時間なしの状態変化は未完結相では捉えられず、瞬きや咳など持続時間の短いものも、単一の事象としてはやはり捉えられず、反復があるときのみ未完結相になれるという制約がある。

2.1　認知時（c）と事象生起時（e）との関係（c ＊ e）

第3項を事象を捉える視点をおく時間軸上の位置としたことによって、事象を捉える視点は事象の生起中におかれるか（c ＝ e）、事象の終了後におかれるか（e ＜ c）、それとも開始以前におかれるか（c ＜ e）のいずれかの時間関係に決定される。

事象生起の前あるいは後に視点をおく場合には、その事象の開始時点、あるいは終（了 / 止）点を見定めることが不可欠である。そのため、ここでは事象が生起していない状態と生起した状態の移行時点、つまり開始点と終点を事象生起の境界とする。このように規定すると、（c ＊ e）の可能な関係は以下のようになる。

①c ＝ e　事象生起中に視点：
事象はその生起の開始点と終点という境界内に限定してその生起中に捉えられる。そのため非有界な事象とみなされる（未完結相）

②e ＜ c　事象生起以後に視点：
事象は時間経過に伴い終点という境界を迎えた時以降におかれた視点から捉えられる。視点を定めた時と事象の間には終点という境界があるために有界な事象とみなされる。（完結相）

③c ＜ e　事象生起以前に視点：
事象は事象開始点という境界より以前の時におかれた視点から捉えられる。視点を定めた時と事象の間には開始点という境界があるために有界

な事象とみなされる。（完結相）[6)]

上記①と②の場合、問題の事象は既に生起していなければならないため、開始時の存在そのものは前提とされていることになる。③の場合については、終点の存在は前提とされていない。節の表す言語的な意味から決まる場合もあるし、または一般的な知識に基づく推論により終点が明確になる場合もある。しかし、いつ終了するか不明確な場合もある。②では終点の存在は不可欠であるので、その点は大きな相違である。

事象生起中に視点をおいて捉えることができるのは、状態、反復、習慣、行為の進行などである。これらには共通して何らかの継続性が認められる。これらの事象は、生起中に視点がおかれると未完結相となる。しかし常に未完結な事象として捉えられるわけではない。状態等が終止し、終点という境界以降の時点に視点をおいて捉える場合には完結相となる。

またある事象の生起を計画、予測する等、その事象の生起開始前に捉える場合には、視点は開始点という境界以前におかれることになる。このように、ここでの枠組みでは状態や習慣等何らかの継続性を持つ事象であっても、開始点や終点が介在することで、その事象そのものの特性には関わりなく「完結相」となることに留意が必要である。

以上は次のようにまとめられる。

事象を捉える視点は、事象生起中か（$c = e$：未完結相）か、事象生起の以後（$e < c$）かあるいはそれ以前（$c < e$）（いずれも完結相）にしかおくことができない。

事象生起中に視点がおけるのは、状態、行為の進行、反復、習慣等何らかの継続性を持つ事象だけである。

これらの継続性を持つ事象であっても、その事象の特性には関わりなく、事象の生起時以前あるいは生起時以降に視点がおかれると完結相として捉えられる。

2.2　発話時を認知時を介してアスペクトに関係づける（u＊c）x（c＊e）

事象を捉える視点は発話時と同時（c = u）であっても、また発話時以前の過去のある時（c ＜ u）にあってもよい。認知時が発話時にある場合には、上記2.1でみた事象の捉え方はそのまま発話時における捉え方となる。

視点が過去のある時点におかれた場合（c ＜ u）というのは、中核的な意味では、話者が過去のある時に経験したことをその時の視点で捉え（e = c）、その時の状況を思い起こしながら発話する場合である（e = c ＜ u）。このとき重要な点は、視点を過去時に設定するためには過去のある時を指定する先行文脈、または文頭に前置された時間副詞類が不可欠な点である。

発話時以降の未来時に視点をおく場合（u ＜ c）というのは、本稿での検討課題である。そもそも視点を未来時におくことが可能か、また未来時に生起する事象を発話時から見てこれから生起する事象（u = c ＜ e）としてではなく、すでに生起中の非有界な事象として捉える（u ＜ c = e）（未完結相未来）とはどのような状況を意味するのかを検討する。

３．過去時に視点をおく（c ＜ u）未完結相（c ＝ e）の特徴

未来時における未完結相について検討する手がかりを得るために、発話時以前のある過去時に視点をおき、その時に生起中の事象を捉える（未完結相）場合、どのような点が完結相で捉えた場合と異なるのかを手短に確かめておこう。

過去時 *tc* に視点をおいて、その時にすでに生起して継続中の事象を捉えた場合、*tc* ではまだその事象の終点は認知されていない。したがって、この事象はその後発話時までの間に終了する可能性も、発話時までそのまま継続する可能性もあることになる。[7)]

以下（1）から（5）はすべて同じ形式による質問とその回答による例文である。いずれも、(a) の質問中に時を表す表現が呈示されている。(b) の回答では節の表す状態は特定の過去の時に生起継続しており、それは発話時には終了していることを示している。それ以降の（c）、(d) の回答では、発話

時の時点までの継続が可能か否かを示している。

以下（1）は節の表す事象が長い時間継続可能な状態、（2）は持続時間が短い状態、（3）は1回の持続時間が短めの状態の連鎖、（4）は単一行為の継続、（5）は単一行為の繰り返しによる習慣的行為についての例である。

まず（1）の例文では、（a）の中の「一昨日出かける時」、「一昨日12時に」が（b）の回答における認知時を指定する文脈となり、この時に事象が生起中であったことが示されている。これに続く文では、その状態は発話時には終了しており、事象は発話時現在においては生起していないことになる。（c）の回答は、その状態が継続している場合である。この時には「も」「まだ」という継続を示す副詞との共起が必要となる。

（1）a . 一昨日あなたが出かける時／一昨日12時に、最新の議事録はどこにありましたか。
b. 私の机の上にありました。今はもうありません。
c. 今<u>も</u>（<u>まだ</u>）あります。／*今あります。

例文（2）での質問（a）への答え（b）は、同じく状態であるが、ずっとそのままの状態を継続するのは不可能ではないが、一般的な生活習慣や生理学的理由からほぼあり得ない状況の例である（c）。（d）の「また」という副詞は、少なくとも1度は退出して、事象の継続は終止した有界な事象として捉えられたことを表しており、こちらは当初の事象は発話時以前に1度終了したことを示している。

（2） a. 一昨日あなたが出かける時／一昨日12時に、田中さんはどこにいましたか。
b. エレベーターホールにいました。いまはもういません。
c. ??今もまだいます。
d. 今もまたいます。

ある一つの事象が生起を開始し、その後いつまで継続可能かは、複数の要因により決定される。第１には、その事象を表す動詞の語彙的アスペクトや、節により表される状況により規定される。その他にも、今見たように、自然法則や一般的知識からの推論により、終了時点が規定されることがある。

次の（3）にみるように、職場として断続的にいたというような場合には(a)(b)、継続時間が短い状態が反復されている場合である。この時は、1つ1つの滞在には始点と終点があるが、それらが連なって1つの連鎖としてみなされるため、発話時まで終点に至ることなく継続しているとみなされる(c)。ここでも、「も」などによる継続を示唆する表現が必要となる。

（3）a. あなたは入社後すぐにどこの建物にいたのですか。
b. 本社の8階にいました。今はもういません。
c. 今<u>でも</u>います。／今<u>も</u>（<u>まだ</u>）います。／*今（は）います。

以上、状態動詞を主動詞とする文により表された事象をみたが、行為の進行・継続（4)、反復・習慣（5）についてもまったく同じことが言える。

（4）a. 一昨日あなたが出かける時／一昨日17時に、田中さんは何をしていましたか。
b. 公園で走っていました。今はもう走っていません。
c. ??今も（まだ）走っています。
d. 今もまた走っています。

1回のランニングには生理的限界がある。そこで、通常は上記のように3日間のうちに終点を迎えるため、表現として、「も」「まだ」が使用されていても、継続していると捉えることは困難である（4b, c)。そのため、一度終了されたと解釈される（d)。しかし次にみるように、習慣を示唆する文脈があると（5b)、継続が可能となる（c)。(d）は「また」により中断後に再開

されたと解釈される。(e) は (a) において入社当時の状態について尋ねている質問に対する回答としては、発話時現在のことのみを述べているので不適切である。

(5) a. あなたは入社時に何かスポーツをしていましたか。
b. はい、(毎朝) 公園で走っていました。今はもう走っていません。
c. 今も (まだ) 走っています。今でも走っています。今も走っています。
d. 今もまた走っています。
e. ＊今 (は) 走っています。

さて、上記にみたことをまとめると次のようにいえる。

過去のある時に視点をおいてその時生起中の事象を非有界として捉えた場合 (未完結相)、その事象はそれ以降に終了しても、あるいは発話時まで継続していてもどちらも許容される。

単一の事象の場合は中断することなく継続されていなければならない。中断が示唆される文脈では、初期の開始時の事象は終了されたものとみなされる。

反復・習慣を示唆する文脈がある場合には、一連の有界事象は1つの連鎖として扱われ、発話時に継続している非有界事象としてみなされる。

事象の生起がある時点まで継続していると話者が判断しているか否かは、上記でみたように、ある時点 (上記では発話時) において事象が生起しているという表現中に「も」、「まだ」、「でも」といった継続を示す助詞や副詞が必ず現れることである。

次節では、ここでみた未完結相の特徴が、未来時において生起が予測される事象を捉える際にはどのような対応になるのかを検討する。

4. 未来時に視点をおく（u ＜ c）未完結相（c ＝ e）は可能か

本節では未来時に視点をおき（u ＜ c）その時生起中の事象を捉える（c ＝ e）ことは、過去時と同じようにできるのかについて検討する。[8] そのために、以下の順で論を進めることにする。

先ず発話時に視点をおき、未来時に生起する事象が有界な事象（完結相）として捉えられる場合の条件を確認する。その条件に合わない場合をひとまず発話時において認められる括弧付き“非有界事象”とする。

この未来時に生起する〝非有界事象〟の特徴を探るために、先に3節でみた未完結相過去の例文から、未来時版を作成する。その上で、過去時に視点をおいて非有界事象として捉えた場合と同じ特徴を持つか否かを検討する。

さらに、この例文がもし、本当の意味での非有界事象、未完結相を表すならば、事象の生起中に視点をおいて捉えるという条件を満たしていなければならない。そこで、この未来時における”非有界事象”を捉える視点が実際どこにおかれているのかを検討する。現実世界では、未来時についての認知活動は、発話時もしくはそれ以前の時にしか行えない。それならば未来時の事象を捉える視点も同様に発話時かそれ以前にしかおけないことになる筈である。

もしそうであるならば、先の未来時における“非有界事象”は、ここでみた3項の時間関係のいずれと対応することができるのか最後に検討する。

4.1　未来時における“非有界事象”

先ずは発話時に視点をおいた場合に、未来時に生起する事象が有界な事象（完結相）として捉えられる場合の条件を確認し、その条件に合わない場合を有界ではないという意味で括弧付き“非有界事象”としよう。

先に2節で、発話時において生起していない事象が発話時以降に生起する場合は、発話時におかれた視点（c ＝ u）からみると、その開始点という境界が介在するため有界な事象として捉えられる（c ＜ e）ことをみた。この

未来時における事象の有界性決定は、発話時以降の開始点の存在にのみかかっており、事象が継続性をもつか否かや、終点の存在を前提とするかには依存しない点が重要である。

この条件によりここでの枠組みでは、発話時に生起していない事象は、継続性がある事象であっても、すべて有界事象として完結相により捉えられることになる。また、発話時に生起している事象は、それが継続する限り、未来のある時までのどの時点に視点をおいたと仮定しても、発話時以降に開始点が存在することはない。したがって、有界事象とはなりえない。そこで、そのような事象はここではひとまず“非有界事象”として捉えることにする。

では、発話時に生起してさえいれば、その事象は未来のある時点においても継続して生起し続けていると言えるのだろうか。先に3節でみた過去時のある時に生起中の事象が発話時まで継続して生起しているとみなされるための条件に照らして検討してみよう。

先に3節では日本語を基に、持続時間の異なる状態、および進行継続中の行為を表す場合についてみた。それぞれ単一の事象として生起する場合と、反復・習慣として生起する場合について検討した。その結果、状態についても、行為の進行継続を表す場合についても結果は同じであった。そこで、ここでは行為の進行継続を表す場合についてのみ検討を行う。以下（6）の例文は単一事象、(7）は習慣の場合である。

括弧内は視点が事象生起中におかれて非有界事象とみなされたか、開始前におかれて有界とみなされたか／事象生起の時は発話時（現在）か、発話時以降（未来）か／単一の事象か習慣等反復か、／および未来時の生起が、容認可の場合にはその解釈、容認不可の場合にはその理由を示した。

過去時についての例文（1）から（5）では、特定の時における状況について質問することにより、回答文のための文脈を提供し、過去のある時からの継続可能性を回答の適格性に基づき判断した。未来時については、まず発話時における事象の生起を確認できる文を呈示している（a)。その後（b）以下では、(a）に基づく話者の予測を表している。

以下（6）の単一の事象においては、動詞の固有の意味や節の意味、ある

いは言語外の生理的条件や一般知識に基づく推論から、継続が可能とみなされる場合が（b）である。同様の根拠から継続が不可能とみなされたり（c）、文脈から事象の短期間での終了・中断が示唆される場合には（d）、最初の事象は終了されたとみなされることになる。（d）では（c）と同じ条件で継続は不可能なうえ、「また」という副詞により中断後の再開始が示唆されている。しかし、反復・習慣を示唆する文脈がある場合（7）には（a）、継続している事象とみなされることになる（b）。

(6) a. 田中さんは今、昼休みに公園で走っている。（非有界 / 単一 / 現在）
b. 今夜8時にも走っているだろう。（“非有界”/ 単一 / 未来 / 予測）
c. *明後日の17時にもまだ走っているだろう。（－－ / 単一 / 未来 / 外的要因により継続不可の予測）
d. 明後日の17時にもまた走っているだろう。（有界 / 単一 / 未来 / 予定、計画）

(7) a. 田中さんは毎朝公園で走っている。（非有界 / 習慣 / 現在）
b. 明後日の7時にも走っているだろう。（“非有界”/ 習慣 / 未来）

以上は話者が発話時に視点をおき、その時に生起中の事象を確認できる場合である。話者が発話時時点の状況について、事象の生起を確認できない場合はどうであろうか。その場合にもそれ以前に得た情報に基づいて、発話時現在の状況を推測し、さらにそれに基づき未来時での事象の継続を予測し、“非有界事象”として捉えることも可能であると思われる。ただし、これまでみたように、話者が適切な情報を事前に入手できており、さらにその情報が文脈として提供されている場合に限られる。

さて、ここまでみたところでは、発話時に視点があり（c = u）、そこで発話時における事象の生起を確認したうえで、それがそのまま継続している場合には、途中に新たな開始点という境界をもたないために、有界な事象（完結相）とはなりえず、したがって“非有界事象”とされるということをみた。

また、発話時に事象が生起していても、未来のある時までの未来のある時までの継続性が認められなければすべて有界な事象としてみなされることになる。さて、このようにみると、日常言語で、未来時に生起する事象に言及している場合の多くは、発話時以降に開始される有界事象とみなされ、そうでない“非有界”とみなされる事象は、発話時からそのまま継続する特殊な場合のみということになる。

4.2　未来時に視点をおくことができるのか

ではここで、この発話時から未来のある時まで継続している“非有界事象”はどのような特徴を持つのか、事象を捉える視点の位置という観点から検討しよう。

過去時において非有界事象として捉える条件は、視点が過去のある時におかれており（c＜u）、その時に生起中の事象を捉える（c＝e）ということであった。では未来時においても過去時と同様、未来時に視点をおき（u＜c）、その時生起中の事象を捉える（c＝e）ということはできるのだろうか。この視点を未来のある時におくという点についても過去時との対照で考えてみよう。

過去時において、非有界事象として捉えるためには、事象は過去のある特定の時に生起していればよく、発話時における事象生起は条件とはなっていなかった。これに対し、未来時では、発話時での生起とその継続が要請されるのはなぜだろうか。この問題は、視点がおかれる認知時において認知される対象の相違に由来する可能性がある。過去時においては、実際に経験をした状況であれ、見聞きした情報であれ、それぞれの話し手がある時点での現実世界から直接受け取ったもので、ある特定の時の体験はその時に確定されたものといえる。

これに対し、未来のある時における特定の事象は、発話時にはその生起が予測（あるいは期待等）されているだけである。それは、現実世界での時間は未だその時に至っておらず、そのために、その事象は未だ存在せず確定もしていない。以下に再掲した先の（7）の田中さんの例でいえば、（a）の現

実世界での発話時においては、(b) の例文中の「明後日」つまり2日後にはまだ至っていない。したがって、2日後に田中さんが走るときにどんな服装か、怪我をしていないか、実際に走るのかなどは未確定である。これは、発話時に田中さんが走っていても、それは発話時現在の田中さんの現実の1回限りの走りであって、2日後になった時に行うであろう走りとは同じではない。したがって、話者は発話時には未来時の未だ生じていない事象は認知できず、その生起途中に視点をおくことも当然できないことになる。

(7) a. 田中さんは毎朝公園で走っている。
　　b. 明後日の7時にも走っているだろう。

しかし、想像の世界でならば、事象を生起させることも、またその途中に視点をおくこともできる。また、その事象の生起の時点も発話時から以降の時に想定することができる。それならば、未来時に生起する”非有界事象”の場合には、この想像の世界の中で、2日後を想定し、発話時のイメージを順次延長してその時に生起中の田中さんのランニングを捉えているとは言えないだろうか。しかし残念ながら、想像の中においては2日後であっても、想像の世界を生み出す心的活動自体は現実世界の発話時におけるものなので、視点は発話時におかれていることになる。したがって、現実世界で未来時に生起する事象を捉える場合には、視点は未来時におけるその事象の生起中にはおくことができず、発話時にのみおかれることになる。

ではなぜ、例えば (7b) の例文では、発話時に認知している毎朝走る田中さんの姿がずっとそのまま継続されて、2日後にもその姿が認められるかのように、つまり視点が2日後にもおかれているかのような印象を受けるのだろうか。そして、なぜそのような全く同じ事象が継続している時にだけ、”非有界事象”となりえるのだろうか。その答えを求めて、次の節ではこの特殊な事象が本稿の枠組みの下で、どのような時間項関係と対応するかを探ることにする。

4.3　未来時における”非有界事象”に対応する時間項関係

先の4.1節では、未完結相未来の唯一の候補とされたのは”非有界事象”であった。しかし、4.2節では、この事象を捉える視点は、現実世界では未来時におくことはできず、発話時におかれるということをみた。したがって、視点の位置という観点からは完全な未完結相未来ではないといえる。では視点が発話時にあり、そこから未来のある時に生起する事象を捉えているということならば、完結相であるといえるのだろうか。視点の位置という点では、確かに完結相の条件を満たしている。しかし、この事象は発話時から未来のある時まで継続して生起しており、開始点という境界がないという点ではその条件を満たしていないと考えられる。したがって、今の分析段階では、完全な完結相とも認められない。ということは、この事象は、未完結相未来の時間項関係（$u < c = e$）にも、完結相未来のそれ（$u = c < e$）にも完全には対応しないことになる。では、どのような時間項関係と対応するのだろうか。

そこで、まずはこれまで見てきたこの事象の特徴を吟味してみよう。これまでの分析から、要となる視点は必ず発話時になくてはならない（$u = c$）。この事象は発話時には生起しており（$c = e$）、<u>未来時のある時（$c < e$）まで継続して</u>生起している。この下線部をどのような時間項関係として捉えるべきかが問題となる。ここでは暫定的に（$c = e \,\&\, c < e$）としておこう。しかし、これでは現在から途切れることなく継続途中の未来のある時に事象が生起するということがあまりよく表されていないように感じられる。

そこで、この（$c = e \,\&\, c < e$）について、もう少し詳しく分析してみることにする。ここで（7）における（a）（b）の各文、特に（b）がどのような意味を表しているかを検討してみよう。ここでの分析を容易にするために、未来のある時を2日後ではなく翌年の元旦に変更し以下（8）とした。

（8）a. 田中さんは毎朝公園で走っている。
　　b. 来年の元旦7時にも走っているだろう。

例文（8）では、発話時に田中さんが習慣として毎朝公園で走っているという情報は（a）で先行文脈として提供しているので、（b）ではそれらの情報は省略されている。

そこで、この（8b）に田中さんという主語を補い、（a）とは独立した文として用いた以下（9a）の場合には、どのような解釈が得られるのかみることにしよう。過去時における事象を捉える際には、前置された副詞類は過去のある時におかれた視点の位置、つまり認知時の値を指定した。しかし、未来時においては視点は発話時におかれる（u = c）（つまり、発話時により指定される）ことから、時の副詞類は前置されていても未来時の「視点」の位置ではなく、必ず未来時における「事象生起時」を直接指定することになる。

これにより、田中さんが元旦7時には走っているということが表される。また、「も」により、この走っている状態は発話時以前にも生じていたことが示されている。反復や習慣の文脈がないので、大会出場など個別の事象が再生起すると予測されたり、その予定があると解釈される。この場合は有界な事象として完結相で捉えられていることになる。

（9）a. 来年の元旦7時にも田中さんは走っているだろう。
　　b. 来年の元旦7時にもまだ田中さんは走っているだろう。
　　c. ?? 今からずっと来年の元旦7時にもまだ田中さんは走っているだろう。
（10）　田中さんは毎朝走っているので、来年の元旦7時にも走っているだろう。

それでは、この（9a）に、「まだ」という副詞を追加したらどうだろうか（9b）。この場合には、走ることを単一事象として解釈するのは不可能なので、反復・習慣として解釈される。発話時における生起を示唆する文脈も表現もないことから、発話時以降のどこかの時点で開始された可能性があるとみなされ、やはり、有界事象として完結相で捉えられることになる。これは、「も」「まだ」という副詞と共起している進行相であっても、発話時からの継続は前提とはされていないということを示している。

ここで、発話時からの継続という情報は（b）の単文の中に導入できるだ

ろうか。（c）にみる限りではそれは難しいといえる。このように発話時からの事象の継続と、未来のある時における事象の生起とを同一の単文内で表すことはできないと思われる。そのため1つの文の中で呈示するには、（10）などにみるようにそれぞれ別の節で表す必要があるといえよう。

ここまでの分析により、”非有界事象”として検討してきた事象を表す文は、発話時での習慣など非有界事象の生起を表す（8a）のような先行文脈がある場合には、（8b）のように単文で表すことができるものの、そのような先行文脈、あるいは話者、聞き手にとっての共有の知識がない場合には、発話時における非有界事象の生起を表す節を必要とすることが示された。逆に言えば、そのような文脈や知識の共有がある場合には、形式的には単文であっても、意味的には2つの節により構成されているのと同じ意味構造に対応するといえよう。

この結果をふまえて、本稿で問題としてきた”非有界事象”がどのような時間項関係に対応するのかという問題に戻ろう。未来のある時に生起する事象は、それが継続性を持つ事象であっても、発話時以降に開始される場合（9a）、あるいは（9b）のように発話時における事象生起が確認されない場合には有界な事象として捉えられる。この場合は視点を発話時におき、未来時に生起する事象を発話時から予測するという完結相未来（$u = c < e$）が対応することになる。

この時、その未来の事象が発話時から継続していることを示すためには、発話時における非有界な事象の生起を表す別の節を必要とする。これら2つの節は同一の文内にあっても、また独立した文により先行文脈として呈示されてもよい。この場合この発話時に生起している事象は非有界な事象として捉えられ、未完結相現在（$u = c = e$）に対応することになる。

”非有界事象”に対応する時間項関係は、このようにどれか1種に対応するのではなく、先行文脈によって呈示された事象の生起と併せて、2種の3項から成る時間項関係を組み合わせることで可能となるといえよう。

ではこの2種の時間項関係は、どのように組み合わされることで発話時からの継続性を表すことができるのだろうか。ここで（8a）で発話時において

生起している非有界な事象を事象 *u* とし、（8b）での未来のある時に生起する有界な事象を事象 *f* としよう。発話時においては視点は事象 *u* の生起中におかれている。この事象 *u* はすでに開始されており、何らかの終止点の明示がない限り、発話時以降も継続して生起するものとみなされている。

一方未来時に生起すると予測された事象 *f* は、未来の時を表す表現により事象生起時を指定されており、「も」「まだ」という副詞があっても、この節内だけではこの事象 *f* が発話時でも生起していることを表せない。そこでこの事象は発話時以降に開始点を持つ有界事象として捉えられることになる。

事象 *u* では発話時から未来に向けて経過していく時間軸上に、毎朝走る習慣が非有界事象として位置づけられている。ここに発話時に生起が確認できないために有界事象とされた事象 *f* が、事象 *u* と同一人物、同一タイプの行為、同一の習慣と認定されることで、翌年の元旦という時間指定の下に重ね合わされ、統合されたと考えられよう。

このように2つの異なる時間項関係が組み合わされていると考えることにより、”非有界事象”の継続に伴って視点が移動するような効果が生まれたり、発話時に視点がおかれることで、開始点という境界を持つ事象として捉えられた筈なのに、ずっと継続しているように感じられるという矛盾も解消されることになる。

以上のように考えることで、発話時から未来のある時まで継続する”非有界事象”を、未来時に視点をおくことはできないという制約に抵触せずに、また、ここでの枠組みに何らの修正を加えるることなく、未完結相により捉えられた非有界事象と完結相による有界事象との組み合わせとして説明できたことになる。未来時における非有界事象のようにみえる事象も、未来時の事象として捉える場合には、一度有界な事象として完結相で捉えることが必要であることが示された。ここで扱った日本語の例文に見る限りという限定付きではあるが、先に4.2節でみた、視点を未来時におくことはできないという結果と併せると、本稿の枠組みの下では、未完結相未来（$u < c = e$）により捉えられる事象はないということになる。

まとめと考察

以下は4節でみた、未来時に生起する事象を未完結相アスペクトで捉えることは可能かという問についてのまとめである。

4.1節における分析から、未完結相過去に相当する特性を持つと思われる未完結相未来の唯一の候補といえる事象は、発話時に生起しており、未来のある時まで中断することなく継続している事象であることが示された。唯一の候補というのは、未来時においては、発話時以降に生起する事象はすべてその開始時点が境界となり有界事象となるためである。そこで、上記の発話時以降継続している事象は、有界事象ではないという理由で”非有界事象”とされた。括弧付きなのは、この段階ではまだ、視点が未来のある時におかれているか否か不明なためである。

しかし、4.2節で人間は現実世界で未だ生起していない未来の事象を、直接体験として認知することはできないために、未来時に視点をおくことはできないことをみた。そのために本稿の枠組みの下では、未来に生起する事象は非有界な事象として未完結相により捉えられることはない、という結果になった。

さらに、4.3節においては、”非有界事象”がどのような時間項関係に対応するのか検討された。その結果、1種ではなく、2種の時間項関係―未完結相現在と完結相未来―の組み合わせによってのみ表されることが示された。その結果、問題の事象の非有界性は未完結相現在にのみ依存していることが明らかとなった。その一方、未来時に生起する事象としての捉え方は、最初に開始点をもつ有界な事象として完結相により捉えられることが示された。その後で、先の未完結相現在と統合されることにより、あたかも未来時に視点がおかれているかのような効果を得ているといえよう。ここでの分析でもまた、未来時の事象は未完結相で捉えられることはないことが示された。これにより、日本語での、限られた分析に基づくものではあるが、未来時に生起する事象は、すべて発話時に視点をおき、有界な事象として完結相で捉え

られる、という暫定的な結論が得られた。

ここで得られた結果はReichenbachともKleinとも異なり、過去時における事象の捉え方と、未来時における事象の捉え方が非対称的なものとなった。また、その内容は未来に生起する事象はすべて完結相により捉えられるというかなり極端なものになった。これは、認知時を第3項としたことに起因していると言えよう。

本稿では、日本語だけに基づいて検討してきたが、同じ枠組みの下で、他の言語、とりわけ先行して現在時制と過去時制の比較を行っている英語とフランス語の分析は今後の必須課題である。特にフランス語においては、未完結相過去及び未来時制に対応する形態素はあるが、未完結相未来を表す形態素はない。そのため、どのような時間項関係との対応が示されるかは、未来時における事象の捉え方を議論するうえで重要な鍵となってくるであろう。他の複数の言語についての結果が蓄積されれば、それを基に本稿での認知時に基づく枠組みの妥当性についても検討が可能となろう。

注

1） Reichenbachは、完了(perfect）も時制として扱っている。

2） Kleinは時制をTUとTTの関係とし、Reichenbachの枠組みでは単純時制ではE=Rとされていた関係をアスペクトの相違に応じた異なる部分的同時関係にしたことで、Reichenbachでは適切に表すことができなかったat that time, the book was on the tableのような過去時制による表現であるにも関わらず発話時に事象が継続している場合でも表わすことができるようになった。また、アスペクトとして4種挙げているが、Klein（2009）では完結相、未完結相の対立に重点を置いている。

3） ただし、過去完了については、英・仏語では事象生起時が認知時に先行することを表すことができるのに対し、日本語のテーイタ形は、事象生起の結果生じる状態しか表わさない。完了形の扱いについては以下2節参照。

4） 残り3種の内、1つは未来時のある時以降に生起する事象を捉えるもの（u＜c＜e）で、3言語共、従属節内ではありえるが、単文内では対応する表現形式はない。もう1つは未来完了で表される事象の捉え方である。完了形の扱いについては2節で示すが、未来完了では、助動詞が時制を担い、事象生起時と認知時との継時関係ではなく、ある事象の生起の結果生じる状態を表していることから、未来時における他の状態の生起と同等に扱う。

最後の1つは過去時における未来であるが、3言語共、従属節では対応する形式があるものの、日本語では単文において対応する形式はないと思われる。また、英・仏語については、自由間接話法による単文での使用可能性の確認および、仮定法・条件法との関連性の検討も含め、今後の課題とされた。これについては、本稿においても引き続き後の検討課題とする。

5） 英語の現在完了については Binnick（2006）、Higginbotham（2008）を参照。

6） この場合、認知時には事象は生起していない状態である。しかし、認知時以降の事象生起は意図、予測、計画など何らかの形で想定されている。

7） Klein（1994）、Declerck（1995）参照。

8） 本稿では、英・仏語における未来時についての迂言的表現においては、時制は、英語では助動詞が、フランス語では aller が担うものとして扱っている。

参考文献

Binnick, Robert I. 2006. Aspect and aspectuality, in Aarts and A. McMahon (eds.). *The handbook of English Linguistics*. B. 44-268. Blackwell.

Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The evolution of grammar:Tense, aspect, and modality in the languages of the world.* The university of Chicago Press.

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect: an introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge University Press.

Comrie, Bernard. 1985. *Tense*: Cambridge University Press.

Dahl, Östen. 1985. *Tense and aspect systems*. Basil Blackwell.

Declerck, Renaat. 1991. *Tense in English: Its structure and use in discourse*. Routledge.

Higginbotham, James. 2008. The English perfect and metaphysics of events, in J.Guéron and J. Lecarme (eds.). *Time and modality*. 173-194. Springer.

Klein, Wolfgang. 1994. *Time in language*. Routledge.

Klein, Wolfgang. 2009. How time is encoded, in Klein, Wolfgang. and Ping Li (eds.). *The expression of time*. 39-81. Moutonde Gruyter.

Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of symbolic logic*. New York: Macmillan.

Smith, Carlota S. 2008. Time with and without tense, in J.Guéron and J. Lecarme (eds.). *Time and modality*. 227-250. Springer.

佐野けい子．2017．時間項関係と時制表現：もう 1 つの対応――日・英・仏語に見る共通性．慶応義塾大学 言語文化研究所紀要第 48 号．79-111.